

あゆみ通信

VOL. 185

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

聞思の人生 金子大榮

金子先生の
お心を非常に
よく表したお
歌に「智慧あ
れば 弟子で
あれかし極み
なき のりを
うくるにさわ
りなければ」



と言う一首があります。「極みな
きのり」と言うのは、無限の法、
永遠の法。それをいただくには、
弟子の姿勢でいただく。普通、お
話を聞きますと、われわれは「あ、
わかった」「あ、それは知つとる」
と、いとも簡単に言います。知識
による理解にはそれでいいでしょ
うが、こと真宗の教えに関しては、
真宗の教えに限らず、真実の宗教
と言うもののただき方は、分かっ
たからそれでもういいと言えない
ものがあるでしょう。

わかって、分かって、もつと
聞きたい。わかれば分かるほど聞
きたい。わからなければ分からない
で、聞かずにおれな。つまり、
わかって、わからないでも、そ
こにあるものは無限なのです。分
からない場合は、無限の問いです。
その無限の問いに答えるものが、
無限の答えです。それが南無阿弥
陀仏ではありませんか。

ですから、われわれはつねに問
いかける。現代人は、いとも簡単
に「あ、そりゃ知つとる」と言う
ような形で、物事をすぐ決めてし
まうけれども、この金子先生の聞
思の姿勢、聞思の心と言うのはそ
うではないのです。(中略)「私は
この年になってもまだこうやって
迷っております。そんな私を親鸞
聖人は雷が落ちるようにお叱りにな
ったのでした」と、こう言うこと
を後輩の私に言ってくださる。
こんな尊いことはないではありませんか。

普通なら、先輩顔をして、「お
れは知っている、君に教えてやる」

と、すぐそういう風になるもので
す。金子先生が「親鸞讃歌」のお
歌で詠んでいらっしゃるように、
聞けども、聞けども喜びは尽きな
い。そこに本当の極みなき教えを
いただく聞思の姿勢と言うものが
見られるのではないのでしょうか。

(後略) (永尾雄二郎「聞思の人生
～金子大榮先生を偲ぶ」法蔵館
より)

(注) 文中の金子先生の「親鸞讃歌」
は、毎年あゆみの会総会資料で
掲載しています。ご一読ください。
＝事務局

門徒会員研修大会& あゆみの会合同研修会

日時 9月17日(火) 13:30

会場 宗恩寺(天王寺区四天王寺)

講師 本願寺「相伝」に学ぶ

講師

池田英二郎先生

(第2組副組長、
宗恩寺住職)

参加費 無料



第2組聞法会

日時 9月6日(金) 14:00

会場 専行寺(天王寺区堂ヶ芝)

内容 お勤めと法話

講師 廣瀬俊先生

(17組 法觀寺住職)
教材『初めての正信
念仏偈』をご持参くだ
さい。お持ちでない方
は、受付でご用意しま
す。

参加費 500円

日時 10月22日(火) 14:00

会場 佛足寺(天王寺区北河堀町)

講師 廣瀬俊先生

(17組 法觀寺住職)
教材「初めての正信念
仏偈」をご持参くだ
さい。お持ちでない方
は、受付でご用意しま
す。

参加費 500円

第2組聞法会8月開催

2024年8月5日(月) 午後2時

から、第2組聞法会が天王寺区

親鸞のことば

迷い続ける存在と理解
する

自身を深信する 愚禿鈔

この言葉は「自分を深く信じ
る」と言う意味です。普通は、
自信を持つこと、辞書によれば、
「自分で自分の能力や価値など
を信じること」と受け取れるの
ではないのでしょうか。しかし、
親鸞の場合はまったく違います。
この言葉は、中国の善導という
仏教に精通した徳の高い僧の言
葉に基づいたものです。どのよ
うな自分を深く信じるのかと言
うと「自身は実際に、迷いの中
にあって、はるか昔から今この
時もこれから、常に迷い続け
て、そこから離れることがまっ
たくない」と深く信じるのです。

開き直りのように思われるか
もしれませんが、そうではなく、
自力を尽くし自力に破れたとこ
ろに自覚される人間の事実です。
この時、人々を救おうとする阿
弥陀さまの本願も同時に深く信
じることとなります。

このように親鸞が「自分を信
じる」と言う場合、それは、自
身は迷い続ける存在であると言
う痛みの中での自覚なのです。
(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の
言葉」より)

聞思して留意することかれ

宗祖親鸞聖人の主著『教行証正』総序
の言葉ですね。

幼少期から青少年期、壮年期と来て、
「なんで…？」が口癖の不平、不満、
愚痴ばかりの日々。これに気付かせて
もらったのが、父母が亡くなり、即應
寺とご縁が出来、義理と厄介でお寺へ
行くように。そこで、親鸞聖人の教え
を聞き、自分に気が付いた。自身に問
いを持たなければ、人生いろいろな時
に、法蔵菩薩さんから「それでエエの
か」と、問いかけられていても気付か
ない。聞思とは、どれほど大切な言葉
でも、聞かずに意味がない。聞いたこと
を自分引き当てて自らの問題として考
えることによってかたがえのない、生
きる原動力になると教えられます。(本)



の光照寺(墨林浩住職)で、組内の住職や坊守、門徒や推進員22名が参加して開催されました。

今回は、先月に引き続き宮部渡先生(15組西稱寺)による『初めての正信念仏偈』で、担当は「本願名号正定業～雲霧之下明無闇」でした。まず、復習を兼ねて全員で読み下し、そして現代語訳を先生が『歎異抄』の言葉を引用しながら詠まれました。

特に、親鸞聖人が海にこだわられ、広大で深い本願のはたらきを表現されていると。今範囲では「如来所以興出世」から釈迦章が始まりますが、



その前段の4行は弥陀章の最終です。休憩後は「摂取心光常照護～雲霧之下明無闇」を、お得意の紙芝居での説明で。

竹中智秀先生の「えらばず、きらわず、みすてず」を紹介されながら。作品は、作者がジョージ秋山の『浮浪雲』(全112巻)の一節です。1993年から2017年まで小学館発行の『ビッグコミックオリジナル』に連載されました。江戸時代末期を舞台にしたコミックです。

元武士で、今は問屋場の主で道楽者の父「雲」、母「かめ」、兄12歳「新之助」、妹8歳「花」の家族。父子の会話を中心に、家族4人を描いた、コミカルにして実は深い話が



語られます。

新之助君の悩みを聞いて、父は「悩むことを恐れないでください」と言います。

「雲や霧」の正体は何か？

煩悩だらけの私たちが、その身から出るはずのないお念仏が出てくださったと言う歓喜が起こる。その煩悩のお陰で涅槃を得ることが出来ると、話されました。

如是我聞7/16第2組聞法会 宮部先生法話要旨 佛足寺 細川克彦



宮部先生の2回のご法話の内、今回の1回目は『正信念仏偈』の「本願名号正定業」から「如衆水入海一味」までについてお話くださいました。

「本願の名号は正定の業なり」のところでは、名号にある「無量寿」について、「寿」は量ることの出来ない遠い昔からの縦のつながりによって、現在の私であると。また、横に無量の関係性を持っていると。

命というときは「私のいのち」と言ったりして、数値で表して、他の人と比べたりして、比較地獄に陥ると。

次に、「至心信樂の願を因とす」のところでは、本願のはたらきに気付かせようとはたらきかけられていることに気付くことが信心であると。私が信じたと言うと、自力になる。そして「等覺を成り、大涅槃を証することは、必至滅度の願成就なり」のところでは、往生と言う言葉に捉われるのではなく、本願を信ずるところに、本願のはたらきが生きている私のところに来ていることが大事であると話されました。

そのことを表現している親



鸞聖人の『帖外和讃』から、「超世の悲願ききしより、我らは生死の凡夫かは 有漏の穢身はかわらねど 心は浄土にあそぶなり」を紹介されました。煩悩は止められないから、相変わらず右往左往するけれど、一旦気付いたものは不退転の位となると。

休憩後は、「五濁悪時」について、劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁について話されました。

分かっても、分からなくても聞法を続けると、如来からたまわりたる信心であるから、「感知」と言って、はっと気づくことがある、それを信心と。思わず頭が下がった。それが信心と。

最後に、「衆水、海に入りて一味になるがごとし」とは、私の命ではなく、「いのちの響きあう世界」にいる本来のいのちに気付き、お念仏申す身になることが大切であると話されました。

予告

大阪教区宗祖親鸞聖人御生誕850年・立教開宗800年慶讃法要が実施されます

8月20日(火) 午後6時から天王寺区光照寺(墨林浩住職)で、大阪教区所長・禿信敬所長と教区役員の訪問がありました。詳細は省きますが、2025年の行事として、教区の慶讃法要の実施が決まりました。詳細は決まり次第、別途ご案内します。

4月17日(木)～20日(日)に南御堂で開催されます。

